

## 平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 臨床心理学教育と訓練の国際連携システム
機関名	: 国際基督教大学
主たる研究科・専攻等	: 教育学研究科 教育原理専攻 [ 博士前期課程 ] 教育学研究科 教育原理専攻 [ 博士後期課程 ]
取り組み実施担当者	: 小谷 英文
キーワード	: 心理療法、心理アセスメント、地域援助、青少年問題、多文化教育

## 1. 研究科・専攻の概要・目的

教育学研究科教育原理専攻は、教育政策研究と心理学専修の2領域を擁し、博士課程を構成している。その上さらに、2002年4月より、心理学専修博士前期課程は、伝統的に教育、研究の大きな柱として展開されて来た臨床心理学領域を専修として特化した。本教育プログラムは、この博士前期課程臨床心理学専修と博士後期課程心理学専修における臨床心理学の教育と研究システムに特化したものである。博士前期課程は、1、2学年合わせて定員20名、で専任担当教員は5名、全員臨床心理士である。また博士後期課程は、専任担当教員が現在、前期課程担当教授1名を含めて計4名である。学生は、臨床心理学を専門とする7名が在籍している。

専修前期課程及び後期課程は、大学要覧においてその教育目標を「臨床心理、精神衛生、個性・創造性教育を領域とする。教育、医療、人事教育、法務、福祉その他の臨床実践に資する臨床心理学の原理、研究法、実践技法について講義、演習、実習、研究指導を行う」と明示している。現代グローバル社会における精神世界の安定に寄与する新しい原理と具体的アプローチが希求される中、これに応える国際的拠点形成に向けて臨床心理学研究と臨床家の指導者養成を押し進めることを、本専修の眼前の課題としている。

## 2. 教育プログラムの概要と特色

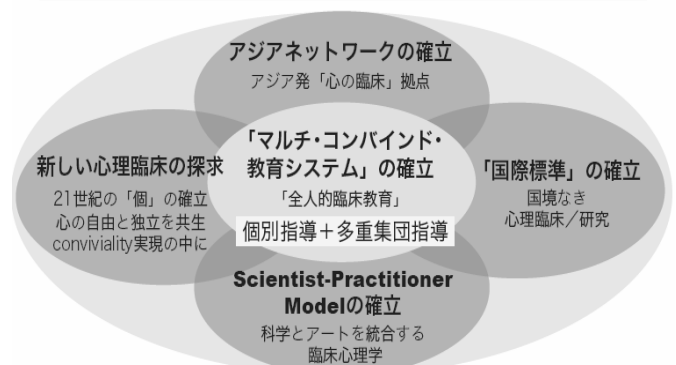
## (1) プログラム概要

臨床心理学の専門性は、「臨床心理学の研究・開発能力を、臨床実践能力とリサーチ能力の相互展開のダイナミズムにあるとする「Scientist-Practitioner」モデルが、国際的に最も高次なモデルとして共有されている。本専修プログラムでは、臨床訓練と研究訓練それぞれに複数の監督者をつけ、その修得を総合的に評価するシステム

を用いている。博士前期課程は国際標準の「カウンセリング」実践能力とその研究、後期課程は5年を基準として国際標準の「心理療法」実践と研究能力の修得を修了課題としている。研究に関しては、前期課程は国内学会で、後期課程は国際学会もしくは国際ワークショップでの発表を目標課題として置いている。

イニシアティブ事業展開に当たって、具体的な課題と使命を総合的に俯瞰したものが、図1である。

## ICU臨床心理学の課題と使命



## — 精神の危機は世界の問題 —

新しいアプローチの希求に応える拠点形成に向けて  
国際・多文化社会に貢献できる臨床心理学研究と臨床家の指導者養成

## 図1 プログラム計画俯瞰図

国内的にも国際的にも、今日の心理社会的問題は、グローバルな変動力学に揺らされている。国内的な学校教育上の問題、家庭内引きこもり、虐待、社会恐怖、組織内不適応、自死、薬物、災害、犯罪被害者問題等々さらに、国際的なテロを始めとした暴力的破壊的混乱、国境を越えた犯罪、災害、等々、臨床心理学における過去の事例の知見のみでは対応できない課題が山積している。

このような現代の心理社会的な問題に対応していくには、変動世界の中で常に有効に働く変数を検討し、同定し、その効果を確認しつつ理論を実践に移す高度の技術を磨く専門家の力が必要である。科学とアートを統合す

る臨床心理学の明解な展開が求められているのである。

大学院は本来、この知と技術を開発する専門家を育てる場とならなければならない。これを具現化するカリキュラム基礎が、「Scientist-Practitioner」モデルである。本専修課程においては、この基本的能力を養成して行く教育・研究プログラムの中で、新時代の心理臨床理論と技法の開発、国境なき心理臨床と研究展開を促進し、アジアネットワークを構築して行くことを目指している。

しかし課題は高次なものであり、その遂行を果たして行くためには教育・訓練方法も創造的なものでなければならない。かつまた常にそれが錆びることのないよう錬磨され続けるものでなければならない。我々はその要求に応える教育・訓練法として、個別指導と集団指導を多重に噛み合わせた「マルチ・コンバインド教育システム」をデザインし、実践開発的にその運用に取り組んだ。手法機軸は、精神分析的システムズ論を基盤にしたチーム・アプローチである。院生は研究も臨床実習も複数の教授の指導を受けるに留まらず、関与する複数の教授によって指導の場も共有される。それは、指導を受ける院生の側も指導をする教授の側も互いにその営みが晒されることを意味する。切磋琢磨するのは院生のみならず教授陣も同様ということになる。院生の側に絞って言うなら、指導の幅と奥行きを常時確保し、指導の歪みやハラスメントを排除すると同時に複数教授による補完競合的なダイナミズムの生産性に浴することが出来る。我々の教育現場に於ける現在進行形のFDシステムである。

## (2) プログラムの特色

課題と使命を現実化するために行った教育システムの整備が、図2に示される。

特色は、前期課程から後期課程への展開の区切りと連続性のダイナミズムにある。海外では、独立処方として区別され異なった領域、異なった教育システムに置かれる「カウンセリング」と「心理療法」が、我が国では歴史的に同義的に扱われている。そこに先進海外諸国にない発展性を有している現実があると同時に、国際標準の処方理解において混乱も生じさせている。したがって国際標準が意識されないと、教育・訓練の質が十分に担保されない問題が生じ、海外から院生を受け入れるに際して、質の保証の問題が生ずる危険もある。

本プログラムでは、国際標準に則って、カウンセリングを博士前期課程で学び訓練を受ける主要心理・教育処方とし、心理療法は後期課程の主要心理・臨床処方として、区別と連続性を理論及び技術研修の両面において明瞭化した。また国際標準も必ずしも安定したものではなく、文化によってその捉え方も現実化の仕方も多様に変

化する。そのために理論や処方、常に国際的評価に晒されていることが必要である。臨床心理学専修カリキュラムの質の保証のために設置されているICU高等臨床心理学研究所がこの課題を担い、この領域において我が国唯一の国際学術誌を刊行し、教育・研修の国際連携ネッ

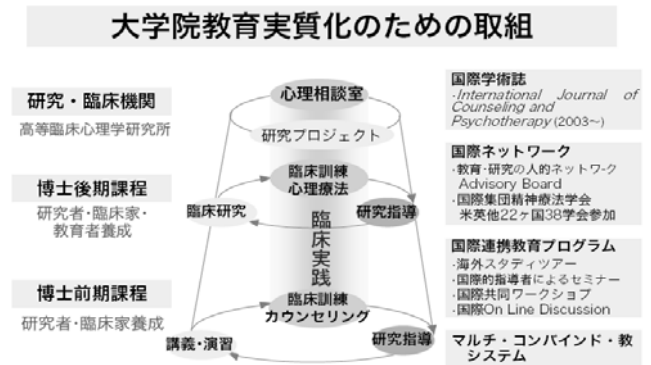


図2 履修・研究展開図式

ワークの開発展開をバックアップしている。

国際ネットワークは、本学を拠点校としてアメリカのアデルファイ大学、G.F. ダーナー高等心理学研究所

(New York)、ヨーロッパはオーストリアのS-フロイト大学 (Vienna) との連携を強化し、さらにイギリス、イスラエル、オーストラリア、スウェーデン、オランダ、台湾と国際的に活躍する心理療法研究のリーダー達とのネットワークを発展させている。この国際ネットワークは、日常的な情報交換と、共同研究、研究討論を可能とするものであり、院生及び教授陣にとってもそれぞれのタスクを評価する重要なフィードバックシステムのひとつとなっている。国際連携教育プログラム展開の実質化は、その集中的な事業と位置づけられている。

## (3) 取り組み事業計画

行動するリベラルアーツをベースにした21世紀本学、大学院臨床心理学専修が追究する課題と使命を展望し、取り組みノーダル・ポイントとして、以下の事業展開を計画した。

### 平成17年度

#### 1) 国際教育・訓練の実質化

##### ①国際心理療法研究・訓練ワークショップの開催

海外有力大学院および研究所と連携して、臨床心理学中核処方の心理療法ワークショップを定期的に主催するネットワーク・プロジェクトを展開し、大学院教育プログラムに組み込む。連携大学院および研究所を、環太平洋地域と欧州に拡大する。連携大学院の指導者をファカルティに加え、国際的指導者を迎えたワークショップを、環太平洋拠点としてのハワイにおいて展開する。

##### ②国際スタディ・ツアーの環太平洋地域での展開

文化要因を考慮した心理療法研究を展開するために、環太平洋地域における国際スタディ・ツアーによる交流大学院の拡充を、ハワイ大学と協力し展開する。

## 2) 国際標準ネットワーク構築

### ①国際共同研究が可能な研究施設の整備

国際共同研究が可能となる臨床、実証研究設備を整え、院生や教員の研究環境を国際水準に近づけることで、国際共同研究を本学で実施することを可能にし、国際水準の教育、研究を日常化する。

### ②国際FDシステムの開発

心理療法の教育と訓練の国際標準について調査研究を行い、FDシステムの国際モデルを検討する。

## 3) 国際共同研究

### ①国際共同研究用具（研究調査用具）の整備

大学院生にとって、国際共同研究プロジェクトが所属大学の主導で動くことは大きな意味がある。プロジェクトの中心で計画に参加し、初学者であれ海外研究者と同等の参与意識を持って責任を果たして行くことが、将来の国際舞台で活躍する大きな素地になる。国際共同研究に向けて、整備すべき設備と研究者との関係構築を今年度の課題とする。

## 平成18年度

### 1) 国際教育・訓練の実質化

#### ①テレビ会議システムによる講義、連携教育

(i) 先端臨床技法と理論の国際講義コースの開設、(ii) 国際共同臨床指導、(iii) 本学講義の国内配信共同授業実験の実施。

### 2) 国際標準ネットワーク構築

#### ①カリキュラム国際会議

臨床心理学大学院のカリキュラム交換と、国際標準案の協議、検討、②プログラム評価、点検のあり方と、FDシステムの国際連携の推進について検討し、③臨床心理学大学院教育の国際連携推進の提言をまとめる。

#### ②教材開発

心理療法訓練の教材研究は、国際的にも国内的にも乏しい。教育・訓練の国際的平準化の努力が国際教育連携を高める。教材研究の国際連携を進め、汎用性の高い教材を開発し実用化を図る。

### 3) 国際共同研究

#### ①海外共同実験研究

国際的研究指導者を招き、共同実験研究を遂行し、その成果を問う国際共同実験ワークショップを欧米有力研究指導者及び環太平洋地域大学院に呼びかけ実行する。

### 4) 期待される成果と養成人材像

本事業展開によって期待される成果の展望を、図3に

示した。本学臨床専修プログラムの成果として養成される人材の具体像によって描いたものである。

具体像は、3軸で立体的に描いた。基本2軸が、「Scientist-Practitioner」モデルの研究能力と臨床能力であり、グローバル社会に貢献する国際展開能力が第3軸である。

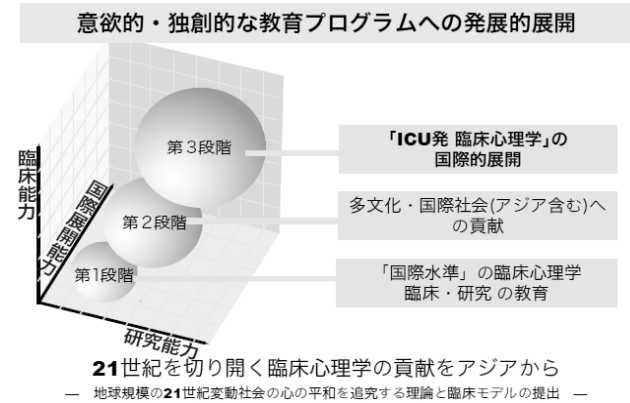


図3 期待される成果

プログラムは、グローバル社会に生きる国際水準のカリキュラム提供を国際資源のネットワーク活用によって展開し、多文化国際社会に貢献できる人材養成を追求する。それはまた、理論と技法において創造的な本学発の臨床心理学を世界に発信するアクション・リサーチによって具現化されなければならない。とりわけ精神世界は、それを支える文化を背景にして東西で2分して捉えられることが一般化している。政治経済のパワーがこれに比重をかけ、何かと西洋が優位な位置取りをし、東洋は神秘のベールをかけられ影響力が薄められて来た。今日の世界規模の争乱は、グローバルを唱導しながら尚この精神性の偏りに一因があるとも仮定できよう。

本学発の新世紀の臨床心理学は、建学の精神からも、新たな東西精神世界の交流と新世紀の精神知を創造して行くモメンタムとなり「継ぎ手」となる貢献が強く期待される。その意味で、我々の臨床心理学グローバル拠点は、アジアネットワークにこそ構築すべきであろう。

我々は、環太平洋の臨床心理学展開拠点を形成し、そこから東西の精神世界が避け合うのではなく、出会う所に生まれる新たな精神原理を追究して行く教育、研究を目指すものである。

## 3. 教育プログラムの実施状況と成果

### (1) 教育プログラムの実施状況と成果

#### 平成17年度実施状況

#### 1) 国際教育・訓練の実質化

##### ①国際共同教育訓練ワークショップの実施

1<sup>st</sup> International Training Workshop for

Psychotherapy (第1回心理療法国際トレーニング・ワークショップ: 略称 ITWP) を、2006年3月11-12日、ホノルルにて開催。本学小谷教授とニューヨーク、アデルファイ大学ゴードン研究所、M. キッセン教授がプログラムを共同企画・運営し、訓練法は本学で発展させているマルチ・コンバインド・システムズ・アプローチによる指導法を初めて国際ファカルティと共に実験検討した。

プログラムの趣旨への積極的な賛同のもと、実に強力な22名の顧問を得た。内訳は、国内7名、海外11ヶ国15名である。講師構成は、アメリカより3名、台湾より1名、日本より9名であった。参加者は、台湾9名、アメリカ1名、東京2名、神戸5名、本学31名を得て、計61名であった。(別添資料参照)。

## ②スタディ・ツアー

(i) 台湾スタディ・ツアー: 臨床心理学教育の躍進目覚ましい輔仁大学医学部臨床心理学科、および台湾における精神医療の先駆的指導的役割を担っている台北市立療養院へのスタディ・ツアーを実施した。輔仁大学ファカルティ、在学生との間で相互のカリキュラムを紹介し合い、互いの課題への取り組みについて意見を交わした。本学からはファカルティ4名院生8名卒業生1名が参加した。台北市立療養院では、台湾の精神医療に関する紹介講義を受け、病棟見学をした。さらに精神分析療法の病院臨床への導入とその教育研修について、医長及び精神分析志向心理治療研修責任者劉佳昌上級医師、蔡榮裕上級医師(現台湾精神分析学会会長)と引率者小谷英文教授との意見交換、討議の場に6名の院生が陪席し、研修を深めた。

(ii) ハワイ大学心理学研究室スタディ・ツアー: 国際心理療法トレーニング・ワークショップのエクステンションとして海外からの参加者ファカルティとともに31名が、ハワイ大学臨床心理学研究室を訪問し、コア・プログラムの研究実践内容についての講義を受け、討論を行った。

## 2) 国際標準ネットワーク構築

### ①ヨーロッパ拠点校との連携基本合意

ウィーンのス・フロイト大学を訪問、学長 A. プリッツ教授(世界心理療法協議会 WCP 理事長)、研究科科長 F. メンデルゾーン教授と協議の上、国際連携教育の展開を進めることについての合意を得た。

### ②アメリカ拠点校との連携強化

心理療法国際トレーニング・ワークショップの共同実施を経て、アデルファイ大学、G. F. ダーナー高等心理学研究所との連携を強化した。

## 3) 国際共同研究

### ①観察記録システムの設置

国際的に汎用性のある心理療法及び集団精神療法のための、観察・実験研究設備を整えた。

### ②遠隔地教育プログラムの態勢整備

国際集団精神療法学会(IAGP)教育委員会に寄与できる遠隔地教育実施態勢を整えた。

### ③実験的研究の開始

研究設備を用いた研究を開始し、高校生の自律的自分を鍛える心理教育の技法構成を行った。

## 4) その他

### ①国内連携共同授業計画

国際連携に加えて熊本大学医学部との学際的教育訓練の実現可能性を現地でのワークショップ実施によって確認し、国際講義の配信によるネットワーク教育実施の基本合意を得た。

### ②卒後研修会

年1回、2日間にわたって行われる本学大学院生及び卒後研修員を中心とした臨床研究年次発表会「ICU 心理臨床卒後研修会議」を、国際連携行事の成果を取り入れて活性化した。大学院生参加者28名、全参加者50名であった。

## 平成17年度事業に係る具体的な成果

### 1) 直接的国際共同教育研究システムの実現

国際的指導者を講師に迎え、アジアを中心にした国際的大学院生集団を対象にした国際心理療法トレーニング・ワークショップを成功裡に終えることが出来、指導者側からも大学院生側からも教育効果の高い成果をフィードバックとして得た。ここには、大きな意義が三つ見出せる。第一は、我々の独自の訓練方法であるマルチ・コンバインド・システムによるチーム・アプローチの意義が国際的な場において高く評価されたことである。これは本事業計画においてFDプログラム展開における点検課題として掲げられていたことである。

第二の大きな価値ある成果は、国際的にトップレベルの研究者、指導者と大学院生を直接に繋ぐ教育研究の場を形成することが極めて現実的になったことである。今回の試みの意義が高く評価されたことによって、国際協力のもとに、国際心理療法トレーニング・ワークショップの実施を継続する下地を作ることが出来たと言つてよからう。この成果はまた、そのまま国際共同研究を展開するネットワーク形成を可能にするばかりでなく、将来の若手研究者ネットワークの基盤ともなる。ICU 心理臨床卒後研修会議の年次大会において、院生及び卒後研修生の活発な研究発表の展開は、その息吹を表すものとして将来への期待を大きく高めるものであった。

教育・訓練をグローバルに共有することによって研究を交換する国際連携システムは、教育・訓練と研究が密接に係る臨床心理学にとって大きな可能性を持っている。世界初のこの試みを日本から発信できたことは、この分野の遅れが著しいアジア地域にとっても意味が大きいと考える。

## 2) 国際標準ネットワーク構築

遠隔地共同教育研究システムの基盤作りの第一歩を踏み出した。世界の拠点校として、ヨーロッパの新しい潮流を代表する S-フロイト大学とアメリカ大陸を代表するアデルファイ大学の2大拠点との間で、教育・訓練のネットワークを形成出来たことは大きい。これは、世界の研究成果を直接に教育現場にもたらしことが可能となったと同時に、本学が我が国の臨床研究を海外へ発信できるバイパス拠点になれたことを意味する。さらに IT 機器を駆使したグローバルレベルの研究施設は、遠隔地共同教育研究を現実的なものにした。このネットワーク形成の実質が認められたことによって、国際集団精神療法学会の教育委員会の活動の一端を担うことの要請に応えることが可能になり、国際連携は学会レベルでも強化された。2008年、第8回国際集団精神療法学会環太平洋地域会議を主催する要請もあり、現在、学会開催の準備中である。

## 3) その他

### ①スタディ・ツアーから ITWP へ

前年のニューヨーク・スタディ・ツアー、今回の台湾へのスタディ・ツアーが、ITWP 実現へと導いた。

### ②学際連携、精神科、精神看護科

臨床心理学は、学際的展開をさらに進める必要がある。精神科、看護科との間で臨床訓練の連携が取れたことは、今後の展開に大きな期待が持てる。

### ③卒後研修

臨床心理学処方習得、熟練には長い期間を要する。卒後研修制度の整備は今後の大きな課題である。本事業が改めて卒後研修の重要性と可能性を訴えるものとなったことは、卒後研修制度整備の課題をまた一歩進めることに貢献するであろう。

## 平成18年度実施状況

### 1) 国際教育・訓練の実質化

#### ①ビデオ・カンファレンス・システムの設置

#### ②第2回心理療法国際トレーニング・ワークショップ

2007年3月19日、ホノルルにおいてファカルティ(日本:11名、オーストラリア、オーストリア、アメリカ、イスラエル各1名)、参加大学院生38名を得て、本学訓練法による教育・訓練ワークショップを実施した。

### ③ビデオ会議システムによる国際講義の実施

本学大学院コース『心理療法(小谷担当)』に、フロイディアンとしてヨーロッパを代表する F. メンデルスゾーン(F. Mendelssohn, Austria)、現代精神分析学派(Modern Psychoanalysis)を代表し、ロシアの精神分析教育推進者である H. スターン(H. Stern, U.S.A.)、元国際集団精神療法学会会長でありラカン派に詳しい精神分析医 S. ラスタムジー(S. Rustomjee, Australia)、関係性理論(Relational Theory)を代表し、アメリカにおける大学院精神分析教育をリードする M. キッセン(M. Kissen, U.S.A.)の講義を組み込んだ。そして世界でシェアできるモデル講義としてビデオ録画し、国内外の他大学にも配信できるライブライブラリー作りに着手した。

### ④国際ビデオ・カンファレンス・シンポジウム

マンチェスター・メトロポリタン大学、I. パーカー(I. Parker)教授と小谷英文教授(本学)の共同企画によって、ビデオ会議によるシンポジウム「分析される日本:世界に開かれた臨床心理学の大学院教育と訓練の新たな出立」を2007年4月2日、4日の2日間にわたって行った。参加者は、両日ともシンポジストを含めて23名。討論者は、マンチェスター・メトロポリタン大学 E. バーマン(E. Burman)教授、アデルファイ大学大学院部長 J.L. チン(J.L. Chin)教授、M. キッセン 教授、及び本学大学院担当専任及び非常勤教員6名で構成し、ビデオ会議による研究会議の有効性を確認し、将来の発展可能性を共有した。

## 2) 国際標準ネットワークの構築

### ①カリキュラム国際会議

1<sup>st</sup> International Conference of Psychotherapy Education and Training(第1回心理療法教育・訓練



**写真1 第1回心理療法教育・訓練国際会議**

国際会議)を主催した。

心理療法を軸とした教育訓練の国際標準を検討する国際円卓会議を、小谷英文(本学) M. キッセン(Adelphi Univ.)、F. メンデルスゾーン(Freud Univ.)による共同司

会によって、2006年11月3-5日、東京において開催した。参加者は、基調講演、シンポジスト、討論者も含めて、日本、台湾、オーストラリア、アメリカ合衆国、オーストラリアの、5ヶ国74名であった。現在の世界の課題、日本の課題、文化的壁の克服の問題が討議され、共有できる教育と訓練の原理が確認された。

### 3) 国際共同研究

#### ①「短期集団精神療法の効果」国際共同研究

博士後期課程生全員が、研究経過をハワイで開かれた国際力動的心理療法研究会第13回大会において発表した。構造的技法論、介入技法論、過程力動論、文化力動論、に関する観察および実証的データ収集を重ねている。データ解釈について、随時海外共同研究者と検討を重ね、データ分析を進め、2008年の国際集団精神療法学会第8回環太平洋会議において成果を発表する予定である。

### 4) その他

#### ①国内連携遠隔地教育の開始

本学講義を、熊本大学医学部保健学科に向けてビデオ講義テストを行い、講義配信の有効利用を確認した。さらに研究会形式をとって、精神科チームに対する定期的な集団精神療法の臨床指導を開始し、遠隔地教育の実効性を確認した。

#### 平成18年度事業に係る具体的な成果

### 1) 国際教育・訓練の実質化

#### ①第2回心理療法国際トレーニング・ワークショップ

本学で開発された訓練システムと教材(R-PT)を用いて国際トレーニング・ワークショップを実施したことで、院生教育の幅を広げることができただけでなく、教員のためのFDプログラムとしても互いに教育・訓練技術を磨く積極的な機会となった。机上の議論だけでなく、教育・訓練の場を国際的リーダー達と共有することによって、現在運用している理論と方法の有効性を確認することができ、教員自身の技術向上のための豊かなシステムを確保した。(添付資料参照)

#### ②ビデオ会議システムによる国際講義の実施

領域を代表する世界のリーダーに最小限の時間負担で講義提供を受け、それを他の大学院、研究所への配信する国際講義システムを日常化できる見通しがついた。

#### ③国際ビデオ・カンファレンス・シンポジウム

単に国際標準に本邦プログラムが匹敵する問題の論議に留まらず、文化の問題を踏まえて、日本からの臨床理論や臨床訓練技法が新鮮さを持って海外に発信できるルートが出来たことは、国際連携教育・訓練システムの展開を進めるシルクロードを切り開いたとも言える。そのことが、ビデオ・カンファレンス・シンポジウムによっ

て、実効あるものとしてネットワークにおいて共有されたことは大きい。予算上、同時多極ネットワークができる設備を備えることは出来なかったが、本学からの発信への関心の高さから海外の大学による多極ネットのキー局を請け負う申し出を受けて、ヨーロッパ、中東、日本、アメリカの4極ネット研究会も可能とする事が出来た。これは、国際連携教育の日常化を意味するものであり、本教育プログラムの中心目的の達成と認識している。この成果はまた、国内の大学や、また心理学、医学の領域境界も超え、さらには国境を越えて、多くの若い学徒が新しい知を広く共有できる可能性を拡大したことを意味する。その恩恵は本学院生のみに限られるものではない。

### 2) 国際標準ネットワークの構築

#### ①第1回心理療法教育・訓練国際会議の主催

本学教育・訓練プログラムの体系と方法の妥当性を国際標準の検討によって確認した。基調講演者として、日本を代表して、心理臨床学会理事長(当時) 鐘幹八郎教授、アメリカを代表して臨床心理士養成のリーダー、アデルファイ大学ゴードン研究所所長 J.L. チン教授を迎えることが出来たのは、議論をグローバル化する上で、大きなポイントとなった。討論円卓には、さらにユーラシア、オセアニア、アジアの代表、日本から精神医学・精神分析界を代表する前信州大学医学部精神医学教室主任、吉松和哉教授、日本臨床心理士認定協会理事、藤原勝紀京都大学教授、他6名が着き、文化の壁を越える論議が多面的に展開された。文化の壁を認識しつつ、グローバル化の健全な展開を目指すべき論議が出来たことを大きな成果と考える。またモデル授業として本学の『心理療法』の講義内容がレビューされ、メンデルゾーン教授、キッセン教授、スターン教授は、通常時限の1/2ではあったが、それぞれの教授法を際立たせるモデル授業を披露し、効果的な教授法の検討とその研究の重要性を確認した。

議論のまとめに当たって、i)本学教育プログラムが米国を代表する教育・訓練のアデルファイ・プログラムに匹敵すると評価された。ii)本学独自開発のマルチ・コンバインド・システムによる教授法が高く評価された。iii)小谷開発の心理療法訓練技法『応答構成法』が評価された。iv)フィッシュボール法によるモデル授業の検討が、効果的FD実践法として評価された。最後にv)教育・研究のニュー・モデルとして本学のプログラムがアジアの代表者にひときわ高く評価され、今後の展開に大きな希望をもたらした。

#### ②日本心理臨床学会国際シンポジウムへの貢献

臨床心理士国家資格化に関わる国際シンポジウム開催

のため、世界心理療法協議会会長、資格制度を高度に発展させているスウェーデン心理学協会代表、資格問題に関するイギリスの専門家の3者を招く全ての交渉を、本学の国際ネットワークを通して行った。またシンポジウム当日の同時及び継時通訳を本学臨床心理学専修大学院生チームが担当した。

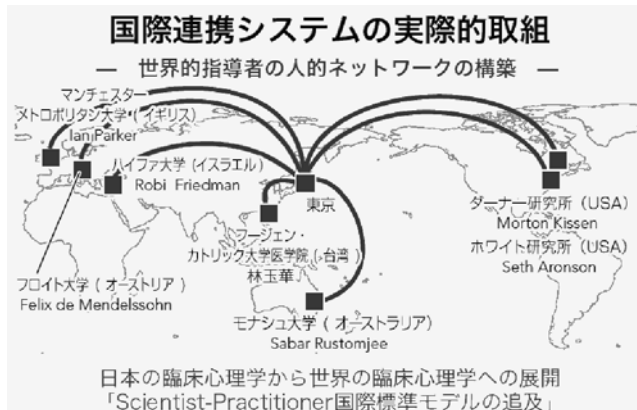


図4 国際共同教育研究ネットワーク図

### 3) 国際共同研究

①国際連携教育研究の実践として、「心理療法のニュー・モデルに関する国際共同実験的研究」の実行

世界の第一線で活躍する研究者と国際研究チームを組むことによる実験研究に、博士後期課程学生7名が研究員として参加し、各自の研究を進める機会を得たことで、国際学界での活動に強い関心と意欲が出た。

#### 4) その他

①国内連携遠隔地教育

熊本大学医学部集団精神療法研究チームとの定期的な遠隔地臨床指導の試みが軌道に乗り、その成果が3月ハワイにおける国際学会 IADP ワークショップで発表され、5月広島での国内学会 JAGP ワークショップで発表される。遠隔地教育の新たな可能性を公表できることの意義は大きい。

②卒後研修

平成18年度卒後研修会議には、51名(内院生24名)の参加があり、ITWP の刺激によって他大学のファカルティの発表もあり、各研修事業間の相互効果も表れ始めた。

(2) 社会への情報提供

本事業における最大の弱点が、社会への情報提供である。実質1年半の事業期間は、国際連携ネットワークの構築と国際共同事業の展開に専らエネルギーが注がれた。広報活動としては、関係領域機関に対して国内外に向けて、郵送、及び電子情報による配信を展開した。一般社会に対する情報公開を広く展開する余裕はなかった。

実施した広報活動

①イニシアティブ事業広報

ホームページによる広報とリーフレットと案内の郵送による広報を行った。特に国際心理療法トレーニング・ワークショップの広報は、アジアを中心にヨーロッパ、アメリカの拠点校に広く呼びかけ、国際共同教育・訓練の可能性と意義を広くアピールした。

(<http://subsite.icu.ac.jp/initiative/>)

②英文 News Letter による広報

大学院プログラムの研究と臨床実習をバックアップするICU高等臨床心理学研究所(IASCP)より、英文による四季刊行の『IASCP News Letter』を発行し、本事業全ての案内と成果をこれに掲載し、国内外の関連機関に広く配布した。2005年秋より現在2007年春(Vol. 4, Spring)まで、6号刊行している。

(<http://subsite.icu.ac.jp/iascp/>)

③文部科学省平成18年度「大学院教育改革プログラムフォーラム」ポスターセッション

医学系大学からの専門家教育・訓練方法に関する関心が高く、多くの質問があった。医学臨床教育基礎に臨床心理学訓練法の応用性の高いことを種々議論することが出来た。領域を超えた一般広報の意義を強く認識した。

④学術的内容の公表

「第1回国際心理療法教育・訓練会議」の成果は、ICU高等臨床心理学研究所刊行のInternational Journal of Counseling and Psychotherapy, Vol. 4, 2006において、公表予定(編集中)である。「国際ビデオ・カンファレンス・シンポジウム」の成果も学術性が高く、同上ジャーナルか書籍として出版を検討中である。

⑤全事業報告書の刊行

2年間を通じての事業全体の報告は、多方面にわたって意味があると思われる。一般配布が可能となるよう、現在報告書を編集中である。

成果

国際行事に関する国内外の主要大学への郵便案内及びホームページによる事業参加への呼びかけは、特に海外の臨床心理学関係者の関心を引くことが出来た。国内的には、国際行事への馴染みの薄さからか、広報活動はさらに必要とされる問題が残っている。海外からは、遠くアフリカの大学からも関心が寄せられ、本学への大学院進学に対する問い合わせが増えた。残念ながら、英語による教育・訓練カリキュラムは未だ十分に整備されていないために、日本語の準備がない留学生は受け入れていない。しかし平成19年度大学院博士前期課程入学者10名の内半数は、海外の大学出身者で占められる結果となった。日英のバイリンガル臨床家が育つことは、国際



臨床家を育てる本学の将来戦略に大きな弾みをつけたものと認識している。

#### 4. 将来展望と課題

##### (1) 今後の課題と改善のための方策

本学大学院は、国境を越える国際的指導者とりわけアジアの指導者の人材養成に具体的目標を置いている。臨床心理学のアジアの指導者養成は、世界心理療法協議会(WCP)、国際心理療法協会(IFP)による学会が、東京、マレーシアそして明年は北京、インドネシアとアジアに集中していることから、明らかに希求されている。本学臨床心理学専修プログラムは、2002年に出発したばかりであり、当イニシアティブ事業の当初の目的はほぼ達成されたものの、国際要請に応える人材養成課題への取り組みは正にその端緒を開いた所でしかない。

##### 1) 課題

###### ①大学院生構成

これまで個々の研究者及び大学、研究機関との間でこつこつと積み上げて来た本学における国際教育・研究活動が、本事業の集中的展開によって一気にシステムアップされた。その広報が功を奏したことが、先に報告したように平成19年度博士前期課程入学生の半数が海外の大学出身者で埋まり、かつ海外からの大学院入学の問い合わせが増える形で表れた。

本学大学院入学者は、本学学部出身者が今年度は1割であったが、大体3割前後に落ち着きつつある。今後さらに、国内、国際的流動性を高めるために、この本学出身者、国内他大学出身者、海外の大学出身者の割合をバランスよく保つことを、積極的に考えなければならない。国際教育が出来るとなると、海外出身大学帰国者応募の増加に容易に傾く恐れがあるし、国内大学の出身者には逆に敬遠される可能性もある。またアジアの拠点校として国際的教育機能を果たすとなれば、アジア諸国の大学院生を積極的に受け入れることを実現して行かなければならない。言葉使用比重の大きい実習を伴う臨床心理学の教育において、教員構成の問題も含めて検討の余地が多々ある。

###### ②事業継続に関わる経済基盤

国際共同研究及び教育を現実的に展開するために、実際には、収入の少ない大学院生のため、またとりわけアジアの大学院生のために、参加費や研究費の支援が必要である。第1回の国際心理療法トレーニング・ワークショップに当たって、この難問に行き当たり基金設立を検討したが、実現に至らず関係国及び国内の篤志家による奨学金支援に留まった。社会資源とのリンクを再検討する課題がある。

##### ③英文教材刊行の問題

本邦には、人社系の学術・テキストの英文刊行を手がける出版社がない。アジア向けの日本発の学術・テキスト刊行ルート構築は大きな課題である。

##### 2) 方策

上述主要3課題に対する現段階の方策は、以下の通りである。

①本学大学院改革の中で、英語による実習を可能にする教員構成とカリキュラム編成の検討。

②国際事業継続のための基金蓄積の検討。

③ICU 高等臨床心理学研究所発刊ジャーナルの活用と出版社の開拓

##### (2) 平成19年度以降の実施計画

本事業において起動展開した全ての事業を継続する。

##### 1) 国際教育・訓練

第3回心理療法国際トレーニング・ワークショップは、第8回国際集団精神療法学会環太平洋地域会議に合わせて(<http://prrc-iadp2008.org>)、2008年10月7-8日に開催する。

心理療法教育・訓練国際会議は、FD事業として次の5年を区切りとして考えたい。その他、国際講義、国際ビデオカンファレンス・シンポジウムは、随時通常運営の中で継続実施して行く。

##### 2) 国際ネットワーク

拠点校キーパーソンとの間で、学術的ビデオカンファレンスを重ねる中で、相互にネットワーク展開の合意書を交わし、実質性を高めて行く。熊本大学医学部との学際的連携事業を日常化させ、実質的遠隔地教育システムを確立させる。また国際講義ライブラリー、教育・訓練モデル、テキスト等の公開、配信システムを確立する。

##### 3) 国際共同研究

構築した本学を拠点とする国際共同研究ネットワークによるデータ・バンクを整備し、成果発表を活発化させ、連携研究の展開をアジアへ広げる。

以上、全ての継続事業は、本学高等臨床心理学研究所(<http://subsite.icu.ac.jp/iascp/>)を通じて公開する。



## 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における事後評価結果

【総合評価】
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的は十分には達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>科学とアートを統合する臨床心理学の展開を求め、大学院をその知と技術を開発する専門家養成の場とするための教育プログラムとして、“Scientist-Practitioner”モデルの実現を図ろうとする本取組は、教育プログラム構築の卓越性と、従来からの取組との連続性が窺え、高い成果を上げている。</p> <p>課題を実現する教育方法として、個別指導と集団指導を多重に組み合わせた「マルチ・コンバインド教育システム」の確立を目指し、その下で展開される教育プログラムとしての前期課程から後期課程への展開の区切りと連続性のダイナミズムは、大学院教育の実質化に貢献しており、また波及効果も期待できる。</p> <p>事業の遂行にあたっては良識ある態度が貫かれており、多様な広報活動（ホームページでの広報、リーフレットの作成、英文ニュースレターによる広報、学術的内容の公表等）が展開されるとともに報告書が刊行されており、評価できるが、課題にも挙げられているように、より広く地域連携、社会連携の視点に立った広報活動の面では工夫が望まれる。</p> <p>将来展望として、国境を越える国際指導者とりわけアジアの指導者の人材養成が目標とされるが、海外の大学出身者の入学割合が増加傾向にあり、当大学出身者並びに国内大学出身者の入学を一層促進し、バランスのとれた構成とすること、また、アジアの拠点校を目指すためには使用言語や教員構成上の課題があることが自己評価として指摘されているが、これらの点については更なる検討が求められる。</p>
<p>（優れた点）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ワークショップのレベルから国際会議のレベルに至るまで、臨床心理学分野での国際共同教育研究のシステム構築に尽力されている。ワークショップは、平成19年度以降の計画がすでに明確化しており、また心理療法教育・訓練国際会議はファカルティ・ディベロップメント事業としての位置づけが明確にされている。</li> </ul> <p>（改善を要する点）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>展開中の独自の理念構築のなかにイニシアティブ事業が位置づけられているために、言及できていない点があるため、明確化が望まれる。（「アジアネットワーク」「環太平洋」「科学とアート」など）</li> <li>「高等臨床心理学研究所」に大きな役割が付与されているが、更にその役割等の具体化が望まれる。</li> </ul>